NY エッセイ 91

中瀬有紀

ブロードウェイ



いい天気のタイムズ・スクエア

「演劇シーズン」というものがいつからいつまでと決まっているわけではないですが、春の終わりは業界が一区切りつく感じを受けます。それはこの時期、1年に1度、トニー賞やドラマ・デスク・アワードの受賞者が発表されるからかもしれません。業界も多様化し、オフシーズンを狙った作品や夏の演劇フェスティバルの存在が大きいのも確かです。しかし歴史的に、ブロードウェイの規模の大きなミュージカルや演劇の開幕は、サンクスギビングとクリスマスホリデーの集客を目指した秋か、トニー賞審査時期に標的を合わせた春か、と聞きます。トニー賞に関しては雲の上の巨匠たちが受賞するものだと、ステレオタイプな印象をもっていましたが、昨年あたりから巨匠たちに混じって随分同世代の知り合いがノミネート、また受賞することが多くなってきました。表彰台に立つ喜びにあふれた彼らの笑顔と、彼らから聞く正直な受賞の感想から、作品に対する主観的な感想はこの際どうでもよく感じ、選ばれたクリエーターたちが1つのゴールに向かって協力しあった事実を微笑ましく思います。

トニー賞とドラマ・デスク・アワードの結果が夏の客足に大きく影響するはずですが、受賞の有無に関係なく今年前半、私の周辺で頻繁に話題に上がっていた作品は、『スポンジ・ボブ』、『スリー・トール・ウーマン』、そして『バンド・ヴィジット』です。『スポンジ・ボブ』は同名のアニメのキャラクターが主人公のミュージカルですが、彼は人間ではなくスポンジで、いくら国民的キャラクターとはいえ日本人の私とは全く接点がないはずでした。しかし、観てびっくり、最高のミュージカルです。一言で言うと、使い捨てのプラスチックに囲まれた消費社会を皮肉に強調しつつも、遊び心満載の美術と照明が現実離れした世界を身近に感じさせます。「こういうの、子どものころ欲しかった!」と思わずにはいられない贅沢な遊び場を大人買いレベルで作ってみたような演出は、どこか懐かしくもあります。また、『シカゴ』のナンバー『All I Care About』で女たちと歌い舞うビリーを彷彿とさせるようなタップダンスのシーンなど、目新しい演出の中に「ミュージカルといえば、これだよね」というクリシェも上手に組み込んでいます。アメリカが生んだミュージカル・エンターテイメントの醍醐味を味わうなら『スポンジ・ボブ』に決まりです。

演劇『スリー・トール・ウーマン』の再演に関しては、デザイナー仲間が「最高のコラボレーション」と絶賛し、気になって観に行った作品です。登場人物の3人の女性はそれぞれ同一人物の90代、50代、20代を演じ、彼女たちの息子役の男性が第2幕に登場します。90代役のグレンダ・ジャクソン氏を中心に1人の女性の人生を振り返り、生きるとはどういうことなのか、幸せとは何かを問いかけるような舞台でした。大変人気の公演のため、チケットを取るのが簡単ではありませんでした。私が観た昼の部は満員で、客層は50代以上の女性がほとんどでした。脚本も演技も素晴らしい中で、何より心を奪われたのは、ミリアン・ビュエザー氏の美術装置です。装飾の美しさは言うまでもないのですが、なにより先述の3人の女性たちが90代女性自身の亡き姿を囲んで話が進む、第2幕をどのように見せるか、鏡とアクリルパネルを巧妙に使ったビュエザー氏の不快でない範囲の視覚トリックが、舞台芸術だからこその表現でした。

今年のトニー賞11部門にノミネートしそのうち10部門で受賞した、ミュージカル『バンド・ヴィジット』については、受賞の有無と作品の好き嫌いに関係なく、今のニューヨークをそのまま表現したようなメッセージ性の高さが話題となっています。社会の多様性を唄い、隣人との違いの中からお互いの心のつながりを見つけるという主旨ですが、このような作品は現在のアメリカ政府が目指しているであろうナショナリズムに疑問を投げかける、ニューヨーカーの主張と見受けられます。その主張に賛同するかは個人次第ですが、国民の一主張を公の場で発表できる環境を賞賛します。今年の夏はぜひニューヨークへ観劇にいらしてください!